

令和元年6月12日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03530

研究課題名(和文) 医薬化に伴う生の変容に関する人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological study on pharmaceutical transformation of life

研究代表者

島蘭 洋介 (Shimazono, Yosuke)

大阪大学・グローバルイニシアティブセンター・講師

研究者番号：40621157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：近年、創薬・製薬過程の分子化とグローバル化が同時に進行する中で、多くの人々が日常的に様々な薬剤を摂取しながら生きるようになってきている。

本研究では、薬剤を媒介として、どのような生に関する科学・技術と政治・経済の新たな連関が出現しつつあるのか、また、そうした連関は人々の生の営みにどのような影響をもたらすのかを医療人類学の視点から解明するための研究を行った。その結果、薬剤は、人口の健康を統治する媒体という側面をもつ一方で、新たな仕方で人びとを結びつけ、新たな関係性の媒体となりうることで、また、いずれの側面においても、化学的過程と社会的過程は相互に構成することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、ライフサイエンスやバイオテクノロジーの発達に伴い、新たな政治や経済の秩序が生まれつつある。こうした事態が人間の生のあり方にどのような影響を与えるのかを理解することは、人文・社会科学における喫緊の課題である。こうした中で、医薬という現在の生物医学の中核を担う対象に焦点を絞りながら、世界各地で民族誌的調査を行うことで、生命に関する科学・技術の発展がもたらす社会的問題や生にまつわる新たな政治・経済についての社会科学的論議に新たな視点を提供した点で本研究は大きな学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要(英文)： The past several decades saw the rapid development of knowledge on human life and technology to transform it at the molecular level. An increasing number of pharmaceuticals are newly invented and, then, produced, circulated and consumed globally. Pharmaceuticals are thus at the heart of transformation of human life at both molecular and global levels.

In this study, we sought to understand how these pharmaceutical transformations gives rise to new forms of bio-politics and affect people's everyday lives by conducting ethnographic researches. Our researches have shown different ways in which pharmaceuticals can become a medium of governing health of population. At the same time, we also found that pharmaceuticals connect individuals in unexpected. A comparison of our ethnographic researches demonstrated both at these levels of bio-politics and bio-sociality, chemical processes and social processes are co-constituted.

研究分野：文化人類学、医療人類学

キーワード：医療人類学 薬剤 創薬・製薬 実験 生政治 医薬化

## 1. 研究開始当初の背景

近年、生命現象に関する分子レベルの知識や技術の発展に伴い、多様な医薬品が開発されるようになり、医薬の製造・販売・流通が急速にグローバル化しつつある。創薬・製薬過程の分子化とグローバル化が同時に進行する中で、生物学と製薬産業の関係（治療と創薬の関係）が緊密に結びつき、医薬を用いた予防医学が日常生活に浸透し、人びとの健康・疾患概念に影響を与えている。また、医薬品の価格、特許、社会的配分が国際社会の中で政治的争点となっている。このような生の「医薬化」と呼ばれる事態が進行しつつある中で、医療人類学やその近接領域では、医薬・薬剤にまつわる諸問題が重要なテーマとして浮上つつある。

## 2. 研究の目的

本研究では、これまでの医療人類学や近接領域での研究動向を踏まえつつ、薬剤を媒介として、どのような科学・技術と政治・経済の新たな連関が出現しつつあるのか、また、そうした新たな連関の出現は、薬剤を摂取しながら生きる人々の生活の営みにどのような影響をもたらすのかを解明することを目的とした。研究参加者は、具体的な医薬・薬剤（免疫抑制剤、イベルメクチン、抗 HIV 薬、鎮痛剤、抗精神病薬、糖尿病治療薬）をとりあげながら、上記の問いを民族誌的に即して解明することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するために、平成 28 年度から 30 年度にかけて、国内外における調査活動、研究会合の開催、国際ワークショップの開催、学術雑誌への特集号および国際学会における分科会での研究公表を通じて、研究活動を実施した。研究代表者・研究分担者による調査活動の概要は以下のとおりである（表 1）。

表 1 研究参加者の調査活動

研究者	テーマ	調査
島園 洋介	臓器移植と免疫抑制剤	フィリピンにおいて、計 5 週間の現地調査を実施。
浜田 明範	乳幼児に対するワクチン接種	ガーナにおいて計 4 週間の現地調査を実施。
モハーチ ゲルゲイ	創薬と臨床試験	ハンガリーおよび日本、ブラジルにおいて合計 5 週間の調査を実施。
西 真如	抗 HIV 薬	合計 4 週間にわたってエチオピアおよびウガンダにおいて現地調査を実施。
飯田 淳子	緩和ケアと鎮痛剤、伝統医療と薬	タイ・日本において計 4 週間の現地調査を実施。
松嶋 健	抗精神病薬	合計 3 週間にわたって日本でインタビュー調査を実施。

## 4. 研究成果

### 研究代表者・研究分担者による調査活動の成果

本研究の研究代表者・研究分担者が研究期間に実施した現地調査から明らかになったことは、以下のとおりである。

- 島園（研究代表者）は、フィリピンにおける現地調査において、生体腎移植を受けた患者の免疫抑制剤の服用がどのような身体像や関係性と結びつくのかを検討した。移植手術および免疫抑制剤の服用は、新たな身体感覚の出現を伴うが、患者は、しばしばそれらの身体感覚にもとづき、移植された腎臓は、独自の「いのち」を宿す他者とイメージされ、その「いのち」が自己と同時に、腎臓の贈り主であるドナーの一部とも捉えられている。こうしたなかで、薬剤摂取薬は、二重の他者（腎臓、ドナー）に対するケアの営みとしての意義を帯びている。これらのことから、薬剤が、新たな身体像の生成とレシピエントとドナーの関係の変容の媒体となることが明らかとなった。
- 浜田（研究分担者）は、ガーナ南部のカカオ農村地帯において、地域保健看護師たちが、乳幼児に対するワクチン接種を行う際にどのように母親たちとの関係性を構築しているのかについて検討した。当該地域において、ワクチン接種の記録は、ワクチンの接種し忘れや二重接種を防ぐために、二重につけられ厳密に管理されている。同時に、看護師たちは自らの活動に周期性をもたせることによって母親たちと定期的に顔を合わせる機会を作り出していた。これらのことから、身体と薬剤のもつ関係が看護師と母親たちの具体的な関係のあり方を媒介していることが明らかとなった。

- モハーチ(研究分担者)は、ハンガリーと日本における代謝性医薬品の服用と治験を人類学および科学技術人類学の視点から検討した。ハンガリーの臨床試験の実験的な場では、モノとしての新薬が、様々な患者の経験を比較可能にする。一方、日本の患者教育の場では、代謝異常の治療薬が投薬されることによる、科学的事実としての代謝と身体感覚としての代謝が相互作用する。モハーチによる研究で、創薬のさまざまな現場における科学技術と異文化をつなぐ「翻訳」の過程を描き出すことで、多文化を内包する医療の可能性が明らかとなった。
- 西(研究分担者)は、抗 HIV 治療のグローバルな展開が、アフリカにおける健康統治の知識や人々の関係性にどのように作用したか、エチオピア社会の事例から検討した。エチオピアにおいては、近年、普遍的治療の戦略にもとづいてすべての国民に無償で抗 HIV 薬を提供する政策がとられるようになってきている。こうした政策によって多くの患者が恩恵を受け一方、この政策は、効率的な健康統治を実現しようとするネオリベラルな生政治と結びついており、病とともに生きる苦しみへの無関心と不関与を促す効果があることが明らかとなった。
- 飯田(研究分担者)は、日本の緩和ケアにおける薬剤の使用が、患者の身体状況のみならず、死にゆく者とその周囲の人々との社会的相互行為や社会関係に影響を与え、そして影響を受けていることを明らかにした。タイ北部の農村においては、医療機関で処方される薬剤や、伝統的に用いられてきた生薬に加え、行商や通信販売等を通じて「伝統薬」と称される商品が流通し、少なからぬ村人により用いられている。本研究では、「伝統薬」の流通には多種多様なメディアや村内外の社会関係が関係し、その使用には村の呪術的慣習も影響していることが明らかになった。
- 松嶋(研究分担者)は、日本の精神医療の臨床現場における薬(抗精神病薬)の使用について、主として精神科医の側へのインタビューを中心として検討した。多量多剤処方が広く行われる一方で、それぞれの医師の精神疾患と治療についての考え方、薬物以外に使用することができる心理療法や地域におけるリソース、そして患者との関係性とコミュニケーションのなされ方などによって、薬が用いられる様態が大幅に異なることを明らかにし、とりわけ薬物をもつコミュニケーション側面について検討した。
- 牛山(研究協力者)は、アトピー性皮膚炎治療を行う皮膚科医、小児科医を対象にかんする調査を行った。医師がアトピー性皮膚炎治療に用いられるステロイド外用薬に対してどのような薬剤観をもっているかを調べた。その結果、医師が大学病院に勤務しているのか開業医なのか、といった立場による違いや、皮膚科医なのか小児科医なのか、といった科の違いなどによって、薬に対する認識の仕方が異なることが明らかになった。

これらの個人研究から明らかになったことを以下のように要約することができる。薬剤の社会的流通は、人口の健康を統治する媒体という側面をもつ。しかし、その一方で、新たな仕方で人びとを結びつけ、新たな身体性や関係性の媒体となりうる。いずれの側面においても、薬剤の摂取による化学的過程と薬剤が生み出す社会的過程は相互に依存しあっており、個々の薬剤やその使用の特性に応じて、両者は相互構成するのである。

#### 学会誌の特集、国際ワークショップおよび国際学会での分科会発表

本研究では、以上に述べたような個人研究の成果に加え、国際ワークショップを通じて国内外の研究者とディスカッションを行うとともに、学会誌の特集および国際学会での分科会発表を通じて、国内外に研究成果を発信した。

平成 28 年度には『文化人類学』の特集「薬剤の人類学-医薬化する世界の民族誌」における論文執筆のためのディスカッションを行った(発表は翌年)。島菌・西・浜田が、医療人類学や科学技術論等における薬剤の研究の動向を総括し、薬剤の民族誌の概念的基盤を整理して提示した。また、研究分担者の浜田、西、モハーチおよび研究協力者の牛山が、上記の個々人の研究成果を論文として発表した。

平成 29 年度には、二度にわたり、国際ワークショップを実施した。Vital experiments: Living (and dying with) pharmaceuticals after the Human では、アベナ・オセオ＝アサレ氏(テキサス大学オースティン校)、郭文華氏(国立陽明大学)、中空萌氏(大阪大学)を招聘し、モハーチ、西、浜田が研究発表を行い、薬剤と「実験社会」に関するディスカッションを行った。Pharmaceutical becomings: Emergent forms of subjectivity and sociality では、ギデオ・ラスコ氏(フィリピン大学ディリマン校)と島菌、飯田、松嶋、牛山が研究発表を行い、薬剤と共に生きる人びとの経験に関する民族誌的研究の課題について討議した。

平成 30 年度には、国際学会 International Union of Anthropological and Ethnological Societies において分科会(Vital experiments: Living (and dying with) pharmaceuticals after the human、代表者モハーチ、浜田、スクリッパ)を組織した。研究代表者および研究分担者に加え、ピノ・スクリッパ氏(ローマ・ラ・サピエンツァ大学)およびカプリエラ・ブルーノ・カメラ氏(ウルグアイ共和国大学)が研究発表を行った。分科会による研究発表およびディスカッションは、前年度の二つのワークショップでの議論を深化させるものとなった。

こうした国際ワークショップと国際学会分科会での研究発表およびディスカッションを通して、当初主題とした「生の医薬化」を理解する上で、実験と経験をさらに今後探究すべきテーマが浮かび上がった。実験とは、既成の医学的知識にもとづく薬剤の使用ではなく、

それを通じて新たな知識が生み出されるような薬剤の使用の在り方である。実験 をテーマとして抽出したのは、日常生活への薬剤の浸透は、さまざまな場面で実験を生み出していることが研究参加者の調査から明らかになったからである。また、経験 をテーマとして抽出したのは、これまでの「生の医薬化」が薬剤の社会的流通、製薬産業、政府や国際機関の薬剤をめぐる政策に焦点を当てるものが多く、薬剤と共に生きる人びとの体験が十分に民族誌的に明らかにしてきたとは言いがたく、さらなる探究が必要である。このように研究参加者と海外研究者との協働を通して薬剤の人類学のさらなる課題を同定しえたことも、本研究の重要な成果であると言える。

## 5 . 主な発表論文等

### [雑誌論文](計 20 件)

1. Hamada, Akinori. "Mass Drug Administration as an experiment: Distributing ivermectin in a rural town in Southern Ghana," Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress (the first volume), 101-108. 査読有  
[https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID\\_CONTEUDO=767](https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID_CONTEUDO=767).
2. Junko, Iida. "Interaction affecting and affected by pharmaceuticals: personhood of an end-of-life patient in picture letters (etegami)," Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress (the second volume), 2018, 3372-3379. 査読有  
[https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID\\_CONTEUDO=767](https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID_CONTEUDO=767)
3. Matsushima, Takeshi. "Administering and taking HITOGUSURI: Interpersonal communication as a drug for psychiatric treatment in Japan," Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress (the third volume), 5874-5878. 査読有  
[https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID\\_CONTEUDO=767](https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID_CONTEUDO=767)
4. Mohacsi, Gergely. "The Pharmaceutical garden: Experimenting with medicinal plants in Vietnam and Japan," Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress (the third volume), 2018, 2165-2178. 査読有  
[https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID\\_CONTEUDO=767](https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID_CONTEUDO=767)
5. Shimazono, Yosuke. "Immunesuppression" as an emergent form of life: An ethnographic inquiry on kidney recipients experience in the Philippines," Conference Proceedings Anais 18th IUAES World Congress (the fourth volume), 2018, 6458-6464. 査読有  
[https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID\\_CONTEUDO=767](https://www.iuaes2018.org/conteudo/view?ID_CONTEUDO=767)
6. 牛山 美穂, 「『論争中の病い』と医師の抱く薬剤観：アトピー性皮膚炎治療におけるステロイドの事例から」, 『人間関係学研究』20 巻, 2019, pp. 149-158. 査読有
7. モハーチ ゲルゲイ, 「代謝の視点から——共に食べることをめぐる六つの覚書」, 『思想』12 号 (1124), 2017, 77-92. 査読無
8. 浜田 明範, 「魔法の弾丸から薬剤の配置へ：グローバルヘルスにおける薬剤とガーナ南部における化学的環境について」, 『文化人類学』, 81 巻 4 号, 2017, 632-650. 査読有  
DOI: 10.14890/jjcanth.81.4\_632
9. モハーチ ゲルゲイ, 「薬物効果のループ——西ハンガリーにおける臨床試験の現場から」, 『文化人類学』81 巻 4 号, 2017, 614-631. 査読有  
DOI: 10.14890/jjcanth.81.4\_614
10. 西 真如, 「公衆衛生の知識と治療のシチズンシップ——HIV 流行下のエチオピア社会を生きる」, 『文化人類学』81 巻 4 号, 2017, 651-669. 査読有  
DOI: 10.14890/jjcanth.81.4\_651
11. 島園 洋介, 西 真如, 浜田 明範, 「序：《特集》薬剤の人類学——医薬化する世界の民族誌」, 『文化人類学』, 81 巻 4 号, 2017, 604-613. 査読有  
DOI: 10.14890/jjcanth.81.4\_604
12. 牛山 美穂, 「脱-薬剤化と『現れつつある生のかたち』——東京のアトピー性皮膚炎患者の事例から」, 『文化人類学』81 巻 4 号, 2017, 670-689. 査読有  
DOI: 10.14890/jjcanth.81.4\_670
13. Hamada, Akinori. "Restyling the milieu: On milieu Making practices around tuberculosis treatment projects in Southern Ghana," Senri Ethnological Report, vol. 143, 2017, 141-161. 査読有
14. Nishi, Makoto. "Reconsidering therapeutic citizenship in the era of universal treatment: (Dis)Connectedness and (non)transformation among HIV-positive people in Ethiopia," Senri Ethnological Reports, vol. 143, 2017, 13-22. 査読有

### [学会発表](計 19 件)

1. Hamada, Akinori. "Mass drug administration as an experiment: Distributing Ivermectin in a rural town in Southern Ghana," The 18th International Union of Anthropological and Ethnological Sciences World Congress, Federal University of Santa Catarina, Florianopolis, Brazil, July 16-20, 2018.
2. Mohacsi Gergely. "The Pharmaceutical garden: Experimenting with medicinal plants in Vietnam and

- Japan,” The 18th International Union of Anthropological and Ethnological Sciences World Congress, Federal University of Santa Catarina, Florianopolis, Brazil, July 16–20, 2018.
3. Iida, Junko. “Interaction affecting and affected by pharmaceuticals: personhood of an end-of-life patient in picture letters (etegami),” The 18th International Union of Anthropological and Ethnological Sciences World Congress, Federal University of Santa Catarina, Florianopolis, Brazil, July 16–20, 2018.
  4. Matsushima, Takeshi. “Administering and taking HITOGUSURI: Interpersonal communication as a drug for psychiatric treatment in Japan,” The 18th International Union of Anthropological and Ethnological Sciences World Congress, Federal University of Santa Catarina, Florianopolis, Brazil, July 16–20, 2018.
  5. Shimazono, Yosuke. “Immunesupression” as an emergent form of life: An ethnographic study on kidney recipients experience in the Philippines,” The 18th International Union of Anthropological and Ethnological Sciences World Congress, Federal University of Santa Catarina, Florianopolis, Brazil, July 16–20, 2018.

〔図書〕(計 2 件)

1. モハーチ ゲルゲイ、「病気と付き合う—慢性病の食事療法をめぐる民族誌的試論」、森明子編、『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』、2019、296–312、ナカニシヤ出版。
2. 島園 洋介、「双方制と親縁性の文化」、宮原暁編、『東南アジア地域研究入門—社会』、2017、234-248、慶應義塾大学出版会。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)  
取得状況(計 0 件)

〔その他〕

とくになし

6. 研究組織

<p>研究代表者氏名：島園 洋介 ローマ字氏名：Yosuke Shimazono 所属研究機関名：大阪大学 部局名：グローバルイニシアティブ・センター 職名：講師 研究者番号(8桁)：40621157</p> <p>(1)研究分担者 研究分担者氏名：浜田 明範 ローマ字氏名：Akinori Hamada 所属研究機関名：関西大学 部局名：社会学部 職名：准教授 研究者番号(8桁)：30707253</p> <p>研究分担者氏名：西 真如 ローマ字氏名：Makoto Nishi 所属研究機関名：京都大学 部局名：アジア・アフリカ地域研究研究科 職名：特定准教授 研究者番号(8桁)：10444473</p> <p>研究分担者氏名：飯田 淳子 ローマ字氏名：Junko Iida 所属研究機関名：川崎医療福祉大学 部局名：医療福祉学部 職名：教授 研究者番号(8桁)：00368739</p>	<p>研究分担者氏名：松嶋 健 ローマ字氏名：Takeshi Matsushima 所属研究機関名：広島大学 部局名：社会科学研究科 職名：准教授 研究者番号(8桁)：40580882</p> <p>研究分担者氏名：モハーチ ゲルゲイ ローマ字氏名：Gergely Mohacsi 所属研究機関名：大阪大学 部局名：人間科学研究科 職名：准教授 研究者番号(8桁)：90587627</p> <p>(2)研究協力者 研究協力者氏名：牛山 美穂 ローマ字氏名：Miho Ushiyama</p> <p>研究協力者氏名：北中 淳子 ローマ字氏名：Junko Kitanaka</p>
---	---

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。